



令和2年10月13日  
No. 39  
文責 校長 飯久保一男

**生きてはたらく知識① …子どもたちの体験・経験**



先日、家に入ってきた「ウマオイ」  
俗称「ずいつちゃん」

私は小笠原で生まれ育ちました。私の妻は甲府で生まれ育ち小笠原に嫁いで来ました。家の中に虫が入ってくると、妻はそれはもう大騒ぎです。私がつかんで外に出しますと、そのつかんだ手を洗えとまた大騒ぎです。妻が虫を嫌いであるということもありますが、虫とどのように接してきたか、私と妻ではこれまでの経験・体験が大きく違うのです。

さらに、今の子どもたちとでは、自然体験や生活体験が大きく違います。生まれたときから、カラーテレビや乗用車、エアコンなどが当然のように身の回りにあった世代です。

※もしかすると、保護者の皆さんも、そういう世代でしょうか？ 私の小学生時代の思い出は「校長のつぶやき その1～その4」に掲載してあります。本校ホームページ【学校長より】をご覧ください。

今の子どもたちは、テレビやパソコンなどを通して、たくさんものを見ていますから、もっている知識には幅広いものがあります。子どもたちに話をしたときに「それ知ってる。テレビで見たことがある。」という声が出ることもたびたびあります。しかし、実際に体験しているかということ…。極論するなら「映像を通して、南極やエベレストの地面は見ているが、家の庭の土をさわったことがない。」「テレビで見たので、トンボやセミの生態は説明できるくらいに分かっている。しかし、実際にトンボを捕まえたこともないし、セミをさわったこともない。」ということにもなりかねません。

文部科学省が「生きる力」を育てることが大切だとし、そのために、子どもたちの体験活動が必要であるとしたときに、子どもたちの自然体験や生活体験について、次の資料が出されました。ちょっと古いデータです。

◇自然体験について（1回も経験したことがないと回答した子の割合）

◇生活体験について（1回も経験したことがないと回答した子の割合）

①高さ1,000m以上の山に歩いて登ったこと	68.0%
②野外でテントに寝たこと	60.9%
③木の実、野草、キノコなどを取って食べたこと	48.6%
④日の出や日の入りを見たこと	43.0%
⑤わき水を飲んだこと	42.9%
⑥親戚や友だちの家などに一人で泊まったこと	39.5%
⑦海、川、池などでつりをしたこと	36.3%
⑧雪を食べたこと	30.9%
⑨自分の身長よりも高い木へ登ったこと	27.6%
⑩外で火を燃やしたこと	24.4%
⑪外でヘビを見たこと	17.0%
⑫海や川で泳いだこと	16.6%
⑬チョウやトンボを捕まえたこと	14.8%

①赤ちゃんのオムツを替えたり寝かしつけたりしたこと	69.4%
②切れた電球をとりかえたこと	46.2%
③おとしよりの世話をしたこと	45.2%
④カマヤナタでものを切ったり割ったりしたこと	41.9%
⑤生まれたばかりの赤ちゃんを見たこと	41.9%
⑥近所の幼い子の面倒を見たこと	36.4%
⑦家族や他人の病気の看病をしたこと	33.3%
⑧赤ちゃんをだっこしたこと	29.2%
⑨ハンカチなどにアイロンをかけたこと	26.4%
⑩1時間以上歩き続けたこと	8.9%
⑪カナヅチでクギをうちつけたこと	8.8%
⑫家で料理をしたこと	6.6%



今の小笠原小の子どもたちに、このアンケートをとったならもっと違う結果になることが予想できます。虫を探している1年生が、いろんなところに手を突っ込んでいて、たくましく、うれしく感じています。また、火を燃やすことなど、今は禁止されている面もありますので、やろうとしてもできないこともあります。しかし、経験をしていることで、プラスになることが多くあることも事実です。理科や家庭科や図工などの授業をすると、子どもたちが経験しているかどうかの違いが明らかになる場合があります。

- <理科> マッチで火をつける, 熱湯を扱う, 虫や小動物を飼育する …マッチのない家庭も多いでしょうか?
- <家庭科> 包丁を扱う(果物の皮をむく, 材料を押さえる手の使い方など), 黄身を壊さずに卵を割る, 油ものの混じった食器を洗う …果物の皮むきの道具がいろいろ生まれていますので, 包丁で皮をむく必要はないでしょうか?
- <図工> ノコギリを使う, カナヅチで釘をまっすぐに打つ, 釘を抜く, ドライバーやスパナでネジを締める, 針金を切る, ヤスリをかける, 塗料を塗る …最近D I Yを取り上げているテレビ番組をよく見ます。



これらは、ほんの一例ですが、これらの経験があることとないことの違いは何でしょう。これらは、前号でお知らせした、学習意欲や学習態度に大きく影響します。水泳の得意な子は、プールでの授業をとっても楽しみにします。計算の得意な子は、算数の授業でよく発言をします。

同じように、生活の中でいろいろな体験・経験をしていることは、授業での学習意欲や学習態度に現れます。動物や植物が好きで、虫を飼育したり、植物の水やりをしたりしている子は、生活科や理科で新しい発見をしたり、新しい疑問をもったりして、課題解決によく取り組みます。家で調理のお手伝いをしている子は、家庭科の調理実習では、見通しをもって、準備から片付けまで手際よく進め、活躍します。ノコギリやカナヅチを使える子は、図工の工作の授業で、作品の仕上がりのイメージをもって授業に取り組めるので、他の子にない発想が生まれます。

もちろん、これらの経験のない子にも意欲をもたせ、初めて経験する子がいることを理解したうえで、授業の中で意識的に経験をする授業をつくっていきます。**体験や経験を通して身についた知識は、確実な知識となり、学習を含む生活の中で使える知識＝「生きてはたらく知識」となっています。**

家庭での体験や経験は「**お手伝い**」がその始まりになるのでしょうか。子どもたちに、家庭の中で、役割がありますか。子どもにどこまで仕事を任せもたせるかは意見が分かれるところかもしれませんが、調理を手伝わせたことにより、食べ物の好き嫌いがなくなったとか、親子で一緒に家事をすることで、親子のコミュニケーションが深まったなどの「**よい効果**」がいくつもあげられています。お手伝いによる効果としては、

- できることが増えていくことで、自信につながる。
- 自信をもつことで、自立につながる。
- 自分に任せられた仕事があることで、責任感が身につく。
- 様々な工夫をすることで、自分で考える力につながる。
- 家族に求められ、認められることで自己肯定感につながる。



などがあげられます。子どもも忙しいというのが、今の子ども達の状況かもしれませんが、テレビを見る時間があるのなら、また、ゲームをする時間があるのなら、家族の一員としての責任のある仕事を任せることは大切なことだと考えます。子どもに任せるより親がやってしまった方が早いという考え方もあると思います。しかし、そのじれったい時間を待ってやることで、**自信・自立・責任感・自分で考える力・自己肯定感…につながる**としたら、**させないともったいない**と思うのです。

失敗してもいいのです。失敗から学ぶものです。失敗して落ち込んでいるようでしたら「手伝おうと思ってくれた気持ちうれしい」とIメッセージを使って励ましてやってください。忘れてやらなかったというときがあってもいいと思います。自分がやらなかったために、家族に迷惑がかかったという経験だって必要です。子どもが自分で考え、やり抜く機会を与えることが成長の機会となります。自分で「どうすればできるか」と考え、やり遂げることで、達成感や責任感を体験し、よりたくましくなっていくはずで